

## 【受験生特集】— さまざまなキャンパスライフを紹介します

## ゼミナール・プロジェクト

少人数で自分の興味や将来の目的にあわせて選択するゼミナールやネットワーク情報学部プロジェクト。理論と実践を学び、情報収集能力、データ分析能力、プレゼンテーション能力といった社会に出てから役立つ力を身につけ、知識や理論だけでなく、「人との関係」を構築する「人間力」も養うことができる。このページでは、「大学ならではの学びの成果」を紹介しよう。

## 経営学部・大曾根ゼミ「基本情報技術者試験」に合格

## 共に学ぶ仲間の存在が刺激に

経営学部大曾根ゼミの田中裕美さん(院修2)、野口徹也さん(4)、池田大輔さん(3)、小池宏和さん(3)が情報処理技術者試験の区分の一つである06年度秋期基本情報技術者試験に合格した。この試験の合格を目標の一つとする同ゼミでは過去80人以上が合格しているが、一度に4人が合格したのは経営学部から情報管理学科が分離独立してから初めて。



▲大曾根教授を囲んで

「高いモチベーションを保ち、取り組めた」(田中)、「同じ目標を持った仲間から刺激を受けた」(野口)、「親身に指導してくださった先生のお陰です」(池田)、「『人間力』も養われたと思う」(小池)とそれぞれゼミ活動を振り返った。

大曾根教授は「知識を身につけスキルを磨くことや、試験に合格することも大切だが、社会で通じる常識と心構えも学んでほしいという気持ちで指導している。『あのゼミに入って良かった』と10年後に思ってもらえるように、今後も学生と接していきたい」と話している。

※同試験については独立行政法人情報処理推進機構ホームページ(<http://www.jitec.jp/>)をご覧ください。

## 商学部・生田目ゼミ セールス・プロモーションコンテストに参加

## 学びのモチベーション得る

「マーケティング・モデルとデータ解析」がテーマの商学部・生田目崇ゼミの2年次生2グループが、(株)KANKO主催「第1回SP(セールス・プロモーション)企画チャレンジコンテスト」に応募し、全15チームがエントリーする中、最終選考に2グループとも選ばれ、うち1グループチームが「セゾンカード」の部で最優秀にあたる「クレディセゾン賞」を受賞した。



▲後列右端が生田目助教授。右から2人目が結城さん、前列中央が為房さん

商学部では2年次後期からゼミが始まる。「ゼミが始まった直後に先生からコンテストの話がありました。正直なところ、マーケティングの知識が不足していたので、全員の基礎知識を共通にするため、自主的に集まり勉強しました」とゼミ長の為房圭一郎さん。何度も話し合いを繰り返す、若い世代の使用頻度をあげてもらうため、「身近でインパクトのあるものを」と、オンラインゲームからポータルサイトに誘導し、カード利用を促進する提案をした。

1次審査から最終選考までの限られた時間の中、為房ゼミ長は、インパクトのある色彩と絵を多用したパワーポイントを作成。12月20日にクレディセゾン本社で行われたプレゼンテーションで発表した結城由隆さんは「練習より本番の方がうまく出来ました。審査員の質問が提案の内面まで引き出してくれたようで感謝しています」と振り返る。

今回の経験から「基礎力の大切さ」と「学ぶ目的」を得たという2人は、「『受け身の姿勢』では何も得るものはない。『双方向のやり取り』が『ゼミ』の魅力です。『やる気』を引き出してくれた、生田目先生からさまざまなことを吸収していきたい」と話している。

## 経営学部・石崎ゼミ 門間勇樹さん「FUTURE 2006」に参加

### 論理性、積極性身について

首都圏5大学(専修、上智、成蹊、東洋、早稲田)で広告、マーケティングを学ぶ学生有志による「大学生意識調査プロジェクトFUTURE2006」に、経営学部・石崎徹ゼミの門間勇樹さん(3年次)が参加。「自分と社会の将来像」をテーマに現代の大学生の考えをまとめた。昨年11月のメディア向け発表会では、OA機器操作を担当した。



▲パワーポイントの担当の門間さん

門間さんは「昨年4月からの期間中、ほとんど休みなしで取り組み、鍛えられました。特に一つひとつを整理して論理的に考える姿勢が身についたこと、グループディスカッションで積極的に意見を述べられるようになったことなど得たものは大きく“一生もの”の体験となりました。ただ、専大からは一人だけの参加で残念。後輩にもぜひ参加を勧めていきたい」と話す。山形南高時代は、新聞部の部長を務め、マスコミ志望。“FUTURE”の経験を就職活動に生かしたいという。

## 商学部・奥瀬ゼミ「NRC-KM杯」に出場

### 他大ゼミと切磋琢磨

商学部・奥瀬喜之ゼミの3年次生4人は、12月23日、立正大で行われた日本リサーチセンターナレッジマーケティング研究所後援の「NRC-KM杯」に出場、青山学院大の土橋ゼミ、立正大の松下ゼミと日ごろの研究成果を競い、「パッケージの審美的要素が消費者に与える影響」を発表したが、惜しくも入賞は逃した。



▲発表する花岡さん(右)

パワーポイント作成を担当した花岡悦子さんは「テーマを決定するのが遅く、準備不足で臨んでしまったのが敗因。緊張のため、質問にも的確に答えられませんでした。他大学の研究は奥が深いと感じました」と反省、「一つのものを作りあげる満足感は得られました。『計画性』の大切さを感じた今回の経験を次に生かしたい」と話した。

ゼミに入ったことで「問題意識をもって見ることの大切さ」を学んだと語る花岡さんは、広告業界への就職を視野に入れ始めたという。

## ネットワーク情報学部・香山プロジェクト 理科離れの大学生へ「ラブエ

## ンス」を展開

ネットワーク情報学部の香山瑞恵プロジェクトの3年次生9人(代表＝春名貴光さん)が、日本科学未来館と協力し、産学連携プロジェクト「理科離れ大学生とサイエンスとをむすびつける場としての科学館・“アイ”のあるサイエンス・プロジェクト」に取り組んでいる(第433号既報)。

これは、カップル／グループ／家族が、携帯電話に示される指令書に従い、科学館の展示を体験することを通して、科学への興味や関心を高めさせようというものだ。12月25日から27日には、同館の全フロアを対象とした「Lovence～ラブエンス」を展開。9月に続き2回目の開催となる今回は、92人がイベントを楽しんだ。

このイベントの成果は、参加者の科学への印象変化や、展示物体験時の動態分析の結果と共に、1月に同館に報告され、指令対象となった展示物を担当した科学スペシャリストと共に、活発な意見交換が行われた。



【受験生特集】— さまざまなキャンパスライフを紹介します

### サークル／課外活動

活躍する体育会やサークル団体のメンバーに課外活動の喜びを語ってもらった。

## Dance Team MISAKI

### 観客との一体感に喜び

ハツラツとしたダンスで観客を魅了するDance Team MISAKI(DTM=高橋友香代表・文1)。鳳祭、黒門祭、入学式でのステージのほか神奈川県や東京の芸能フェスティバルに多数参加、学外でも活躍している。昨秋、千代田区「江戸天下祭」大学対抗パフォーマンス大会では、2年連続優秀賞(最高賞)に輝いた。NHK紅白歌合戦では、演歌歌手のバックで舞台に立った。

「役柄になりきり、私たちが“のる”と観客ものってくる。一体感が生まれた瞬間は最高です」と語るのは、前代表の佐藤彩子さん(文3)。

メンバーは19人。「現在2年次生が一人もいません。皆さんもチャレンジしてダンスの喜びを知ってほし

い」。DTMホームページ [http://www.geocities.jp/dance\\_team\\_misaki/](http://www.geocities.jp/dance_team_misaki/)

## 選手と観客の架け橋に

### 全学応援団チアリーダー一部一選手と観客の架け橋に

野球、陸上、アメフトの試合の応援で、選手と“観客席”を結ぶ懸け橋となる全学応援団チアリーダー一部BLASTS(阿部詩帆代表・商3)はこの1年、喜びが続いた。野球部が東都大学野球秋季リーグ戦で1部に復帰。正月の箱根駅伝では陸上競技部が来年のシード権を勝ち取った。

「最高の瞬間が二つもあってそこで応援が出来た。宝物の思い出です」と声を弾ませるのは副団長でチアリーダー部長の石川倫子さん(経営4)。

存在は華やかだが、ジャンプ、スタンツ、ダンスの高度な演技を支える地道な練習が不可欠。昨年外部コーチを呼び、基礎から鍛え直した。

スポーツの応援のほか、年4回開かれるチアリーディング大会への出場も主要な活動のひとつ。新コーチの下、大会での活躍も期待される。

「元気さと笑顔を周りに広めることが出来ました」。悔いなしの4年間——石川さんはそんな表情で語ってくれた。

## 学生部長賞にサイクリング同好会

顕著な活動のサークル団体に贈られる学生部長賞に、創部40周

年を迎えたサイクリング同好会が決まり、1月30日、生田キャンパスで表彰式が行われた。古川仁代表(経営3)に大石和男学生部長から賞状、記念品が贈られた。



喜びの部員(左は柴田隆顧問)

## 【受験生特集】— さまざまなキャンパスライフを紹介します

## 活躍する若き卒業生

さまざまな舞台で活躍中の卒業生の皆さんに、本学で学んだ思い出や現在の仕事、今後の抱負について話を聞いた。

## NHK横浜放送局・日高 治子さん(平11経営)

## 演劇で培った表現力 声を生かした仕事に

昨年10月からNHK横浜放送局で、「こんにちは いっと6けん」などを担当。さわやかな笑顔で情報を発信している。

大学では演劇研究会「畝傍(うねび)座」の活動に没頭した。「演技は初心者でしたが、『セリフを読み解くこと』、『人に楽しんでもらえる喜び』を知りました」

と振り返る。「戦略経営」がテーマの奥村経世ゼミで、同期のほとんどが有名企業に就職を決めた中、音楽関係の販売職についたが、友人に「せっかくな声をもっているのだから、それを生かしてみたら？」とアドバイスされ、初めて自分の「個性」に気づいた。

「芝居をしている時も先輩から『セリフ読みはいいのになあ』とよく言われていました(笑)」。

それをきっかけに、「声」にかかわる仕事に就こうと決意する。アナウンスの学校に通いチャンスを待ち、NHK長野放送局の契約アナウンサーに。「初めての仕事は生中継。無我夢中でこなしました。長野では全時間帯の番組を担当しましたが、たとえ放送時間はわずかでも、取材にはかなりの時間をかけるんです。そこでの出会いや教わったことを今でも大切にしています」。取材先で教えてもらった「いつも明るい方を向いていれば、きっといいことがあるよ」という言葉に何度も励まされた。

3年間の契約後、出身地の神奈川で採用された。「取材ではまず自分をさらけ出し、相手に本音を語ってもらえる雰囲気心がけています。一瞬が勝負ですから『瞬発力』が必要な職業だと思います。実際の放送では、ゼミでのプレゼンや演劇での表現力が役立っていると感じています」。

「声」の仕事にずっと携わっていきたくないと瞳を輝かせる。「神奈川の魅力を知っていただきたいという思いでお伝えしています」という日高さんの出演情報は横浜放送局のホームページで。

## 川並 正樹さん(平13経済)

## 途上国に向けて スキルアップを図る

高校時代、偶然目にした「砂漠を緑化する」テレビ番組に感銘を受け、環境保全に携わりたくと国際経済学科に。中南米地域研究を専門とする狐崎知己ゼミに学び卒業後、インドネシアのスラバヤで、コンポスト事業の構築にかかわった(第408号掲載)。

途上国での「持続可能な開発」を目指し、スキルアップのため米国のSouthern New Hampshire大学院国際経済開発学部に進む。ホンジュラスのNGOで3カ月のインターンシップも経験し、昨年5月に卒業した。米国では留学生が大学卒業後、1年間就労出来るビザ(OPT)が発行される。その権利を生かし9月から、バーモント州で最も古い環境保護団体「Merck Forestand Farmland Center」でインターン生となった。「有機農業、畜産、森林管理などを学ぶ一方、環境教育の視点から子どもたちにネイチャーゲームを通じて、自然と親んでもらうための仕事を担当しています」。

毎週行われるスタッフとの勉強会では食糧、森林環境の問題などをさまざまな角度から話しあっている。米国中心の考え方の中、自身の「違った見方」は周囲に刺激を与えているという。

「理論だけでなく実践することで、プロジェクト・マネジメントを実行する際、コミュニティの人たちの要望を聞きながら、最適な方法を引き出すことが可能となります。開発の方法は一樣ではなく、地域ごとの文化的背景を理解した上で、地域に根づくものを実行していかなくてはなりません。そのための『引き出し』を増やし、多様な状況に適合出来る『自分』をつくっているところです」。

描いた「夢」を実現するため、英語のほかインドネシア語、スペイン語、中国語の語学力を強みに、国際協力機関や開発コンサルティング会社への就職を目指し、学び続けている。

ニチレイフーズ・渡辺 千春さん(平14法)

## つくり手の“思い”をパッケージにこめる

需要が増え続ける冷凍食品業界。ニチレイフーズのマーケティンググループで「商品の顔」となるパッケージやパンフレットの企画・制作に携わる。

「冷凍食品の商品選びは『2、3秒が勝負』と考えています。写真と短い言葉で『つくり手の思い』を伝えられるパッケージを目指しています」。

顧客満足度調査やモニターによるグループインタビューから気づかされる点も多く、「見た目」だけでなく「使う側」の視点も意識するようになったという。ジッパー袋入り「少量冷凍野菜」も、生活者の食生活や冷凍庫の使用状況を調査した結果から商品化された。

「多くの人がかかわり苦労を重ねて作っても、実際はすぐに捨てられてしまう『パッケージ』ですが、他社と比較した時に購入する『少しの後押し』となり、トータル的に商品のファンが増え、企業価値を高めることが出来れば、役割は果たせると思っています」。お客様や営業担当からの「パッケージがよかった」という評価が励みとなっている。

最近「ユニバーサルデザイン」を取り入れる企画を考え、自主的に学んでいる。「お年寄りからお子さんまで、誰にでも使い勝手のいい仕様にして、多くの方々に当社の商品を楽しんでほしい」と抱負を語る。

入社して半年間は営業を経験。新人には達成困難な売り上げ目標に悩む日もあった。「ヒントは教えるが答えは自分で探せ」と言うふだんは厳しい先輩から「お前なら出来る」と励まされ、「信頼は裏切れない」とプレッシャーを乗り越えた。「食べることが大好きで入ったこの業界。周囲に恵まれ、成長出来ました」と振り返る。

「休日の買い物でも、お菓子や他の商品のパッケージを観察してしまい、オンとオフの区別がないんです」と笑うが、「あきらめず、妥協点は高く」を胸に「いま任された仕事」を極めたいと前進する。

月刊『psiko』編集部・矢嶋 桃子さん(平14文)

## 一人旅で“リセット” 人間洞察への契機に

大学4年次に休学して4カ月間、一人旅をした。バックパッカーになって、パリを振り出しに南欧、北欧へ。地球最北端の地、ノルドカップまで足を伸ばした。

「悩める人の力になりたい」とカウンセラーを志し、専大では心理学科に学んだ。ところが、思いもかけぬ不幸が自身に訪れた。「厳しく、とても大きな存在だった」母が急死。悲しみの中で、抜けた歯車に自分がならなければならないというプレッシャーに精神的にも肉体的にも疲れ果て、「壊れる」寸前に陥った。思い切った訪れた学生相談室のカウンセラーに話を聞いてもらい、思い至ったのが日本脱出だ。

土地にしっかり根を生やしおおらかに暮らす人々や世界各国の旅行者たちと行く先々で触れ合い、「常に完璧に」と律してきた自分をみつめ直した。心の中のさまざまな葛藤と冷静に向き合った。「そこで、しみじみ思ったのです。少しいい加減になってもいいかなって」。

と同時に、人間に対する興味がますます募った。帰国後、東京・東麻布で友人が始めたスペインレストランを手伝い、女性情報誌で話題になったことも。

進路はマスコミ関連を目指し、派遣社員、編集プロダクション、広告代理店を経て出版社のポプラ社に入社。女性誌『psiko』の編集スタッフに加わった。30代前半の女性の暮らしに、心理学を生かして切り込んでいく編集方針がユニークな雑誌だ。創刊当初のテーマは「心の荷物をおろしてみませんか」。

「こんな雑誌を作ってみたかったのです」

在学中のゼミは山上精次教授が指導。昨年は本学のHEIB講座指導教員の神原理助教授に呼ばれ、「働く女性の代表として」同講座の講師に。人間にはいろいろな生き方があっていい。だからこそ面白いのでは——。自らの体験を振り返った。



【受験生特集】— さまざまなキャンパスライフを紹介します

## 部活拝見

### 陸上競技部

#### 「サポートに感謝」

今年、12年ぶりにシード権獲得をした陸上競技部。年々確実に実力をつけてきた。

部員は現在マネージャーを含め36人。練習はほぼ毎日。専大にはトラックがなく、多摩川や大和グラウンド等へ移動して練習する。高橋良輔主将(経済4・藤沢翔陵高)は「トラックがあればいいなと思うが、他大の陸上部の話を知ると分かるのが、専大のサポートはすごく良いということ。しっかりやれているし、不満はない」という。

高橋主将はこの1年間、けがに悩まされ、サブの選手たちと練習する機会が増えた。腐らず一生懸命練習する姿を見て、「出場する選手はもちろん、下で支える選手の頑張りこそ、このシード権獲得につながっていると思った」と言う。「結果の出る、出ないはあるが、大きな差はなく、全員が高い実力を持っている。皆が良い雰囲気を作ってくれ、主将としては本当にやりやすかった。いいチームでした」。

新生・陸上競技部も、今までのように、そしてさらに、輝き続けてほしい。



▲オール専修の期待を担い、練習に励む部員たち



高橋主将

(松本 かおり・文1)

## 【受験生特集】— さまざまなキャンパスライフを紹介します

## チャレンジ 専大生

キャンパス生活を送りながら、好きな分野に挑戦している学生二人に話を聞いた。

## 「R&amp;B」に打ち込みCDデビュー

齊藤 博樹さん(経済4)

学業のかたわらシンガーソングライターとして、CD制作のマスタリングエンジニアとして活動してきた齊藤博樹さん(経済4)が、初のマキシシングルCD「Cruise'on, with me」を発表。インディーズデビュー(CHKミュージック)を果たした。歌、作詞、作曲から技術面まで、ほぼオールセルフプロデュース。優しく包み込むようなサウンド、みずみずしい歌声が魅力的な作品だ。

齊藤さんが好きなジャンルはR&B、あこがれはアール・ケリーだ。「卒業後もライブやエンジニアの仕事が続けていきます。力をつけて、本場のアメリカを訪れてみたい」と話す。好きな音楽に没頭した4年間。「自分のやりたいことが見つからないという学生がいると聞きますが、私の周りにはみな、目標を持ってキャンパス生活を送っていますね。そんな仲間たちから刺激を受けました」。

ファーストCDは完売。現在、2枚目の準備に取り掛かっているところだ。



▲生田キャンパスのカフェ「茶々」の前で

## 初挑戦のハーフマラソンで4位入賞

東 祐佳里さん(文1)

昨年12月3日に開かれた「第2回はだの丹沢水無川(みなせ)マラソン大会」の女子ハーフ29歳以下の部で東祐佳里さん(文1)が4位に入賞。「初めてチャレンジしたのですが、もう少し頑張れば3位になれたのに」と悔しがりますが、「達成感と爽快感」の魅力に引き込まれた。

小さいころから走ることが得意で運動会では常に上位。中学では卓球部だったが、「助っ人」として出場した駅伝大会で「走る楽しさ」を知った。秦野南が丘高校で陸上部に入り、「最も苦しい」と言われる中距離種目を専門にした。「経験者ばかりで、最初はついていくのがやっとでしたが、投げ出さなくなかった」と3年間やり遂げた。

自宅近くの競技場で自主トレーニングをして臨んだ今大会。「『秦野』という恵まれた環境の中で、自然に『走る力』が付き、生田キャンパスの『坂』がさらに鍛えてくれた」と語る。

入賞をきっかけに本格的なトレーニングの必要性を感じ、フルマラソン挑戦も視野に。「走りながら『自然』を体感し、みんなで走ることで頑張れる」市民大会にこれからも出場していくつもりだ。

